

# 稚内港

## 稚内市建設産業部物流港湾課

〒097-8686 北海道稚内市中央3-13-15

☎0162-23-6482

URL : <https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/sangyo/kowan/>



## 1. 概況

18世紀後半の天明年間に漁場が開かれ、稚内港の歴史が幕を開けて以来、稚内港は稚内の歴史とともに歩み続けている。北半球の中心にあたる北緯45度に位置する、世界に開かれた港湾として、より高度な機能を整えるとともに、「街のシンボル」として隣接する市街地も視野に入れた整備が進められている。

稚内港が大きな発展を遂げるきっかけとなったのは、日露戦争後の1905(明治38)年、南樺太(今日のサハリン島南部)の領有が決まったことである。地理的に近い稚内港を中継港として活用する気運が高まり、1919(大正8)年、政府決定による「第一期北海道拓殖計画」に稚内港の防波堤や貨客船バースを本格的に整備する計画が加えられた。翌1920(大正9)年に着工された工事は、1923(大正12)年の鉄道完成と同時期に完成した。

この年には鉄道省による稚内港と樺太の大泊港(今日のコルサコフ港)とを結ぶ「稚泊航路」が、翌1924(大正13)年には北日本汽船による稚内・本斗(今日のネベリスク)間の連絡船がそれぞれ就航した。また、利尻・礼文両島との間を結ぶ航路も稚内利礼運輸(今日のハートランドフェリー)によって開設され、稚内は海上交通の要衝となった。

これらの航路の棧橋として、26歳の若き土木技師土谷実氏設計により、1931(昭和6)年から1936(昭和11)年までの5年の歳月を費やして北防波堤ドームが完成した。激しい波浪や風から船や施設を護るため、他に類例の無い「ドーム式」が採用された北防波堤ドームは、古代ギリシアの柱廊を想わせる独特の形状で知られている。樺太へ連絡する列車は、ドーム前に敷設された線路に滑り込んでいた。現在では、樺太航路の遺産として、さらには稚内港や稚内市のシンボルとして、広く親しまれている。

樺太を失った戦後も、機船底曳による北洋漁業の開発や天北石炭の需要により、稚内港の利用も増加し続けた。1948(昭和23)年1月には関税法による「開港」の指定、1952(昭和27)年7月には出入国管理令による「出入国港」の指定、1957(昭和32)年5月には港湾法による「重要港湾」の指定、さらに1962(昭和37)年6月には検疫法による「検疫港」の指定をそれぞれ受けている。

1970(昭和45)年から利尻・礼文両島との間を結ぶフェリーが就航したことを受け、1974(昭和49)年には北埠頭にバースを増設した。翌1975(昭和50)年からは天北地区に外国貿易機能を備えた天北1号埠頭を建設し、背後に76haの用地も

造成した。稚内港は近代的な港湾に生まれ変わった。

1974(昭和49)年に「利尻礼文サロベツ国立公園」の指定がなされて以来増加する観光客への対応や、生活へのうらおいを求める市民の要望に応えるため、稚内港のシンボルである北防波堤ドームの全面的修復工事が1978(昭和53)年から30年で実施された。1987(昭和62)年には北防波堤ドーム内部と一体化した親水護岸「しおさいプロムナード」が完成し、さらに天北地区の緑地整備にも着手され、稚内港は「憩いの空間」としても体裁を整え始めた。

1990年代に入ると、ロシアなど諸外国の船舶が稚内港に寄港する機会が顕著に増加した。また、1995(平成7)年には、半世紀ぶりに稚内港とサハリンのコルサコフ港とを結ぶ定期航路が復活した。「世界への玄関」としての稚内港への期待がますます高まり、「街のシンボル地区」として隣接市街地への広がりも視野に入れた「稚内マリントウンプロジェクト」が構想された。

1995(平成7)年までには、第1期事業の中核となる港湾文化交流施設「シーポートプラザ」、港湾厚生施設「市民温水プール・水夢館」が完成し、さらに船員や港湾利用者向け利便施設「ポートサービスセンター」も整備された。

1995(平成7)年からのマリントウンプロジェクト第2期事業では、利尻・礼文両島への国内フェリーとサハリンへの国際航路を2008(平成20)年に中央埠頭に集約し、JR稚内駅を中心とする市街地再開発や第一副港地区再開発事業と連携したシンボル緑地(通称「北防波堤ドーム公園」)が2012(平成24)年に完成し、交流拠点の形成が図られている。

近年、クルーズ需要が増加する中、より大型のクルーズ船を受け入れるため、末広埠頭において岸壁延長不足や係船柱の強度不足に対応した整備が2018(平成30)年に完了し、より安全な入港が可能となった。

稚内港背後圏は、国内で最適な風況地域であることから送電網の整備や風力発電の建設が進められているほか、対岸サハリンでの大規模な石油・天然ガス開発事業が進展していることから、稚内港はそれら資機材の基地港として期待されている。稚内港ではこれまでに公共上屋や保税蔵置場の整備のほか、埠頭用地の地盤改良、200吊クローラクレーンの配備など、港湾機能強化を図ってきており、今後もより利便性が高い港湾への期待が寄せられている。

稚内港は2017(平成29)年に津波や地震に対する事業継続計画(BCP)を策定し、有事の際にもこれら地域の拠点となる強い港湾に向け、引き続き港湾施設機能強化を図っていく。